

（久元祐子 モーツァルト・ソナタ全曲演奏会 Vol. 5）
 ベーゼンドルフアー 280VC で奏でる
 伝統のウィンナー・トーンとダイナミックな音色

モーツァルトの演奏・研究で高い評価を受けている久元祐子さんが、2016年1月からスタートさせた「モーツァルト・ソナタ全曲演奏会」の第5回目が、10月27日、サントリーホールブルーローズで開催されました。毎回、モーツァルトのソナタ以外の作品や他の作曲家の作品を織りまぜ、多角的な視野でモーツァルトのソナタの魅力を紐解いているこのシリーズ。今回は、「ハイドントとモーツァルト」をテーマに、ハイドントがモーツァルトに与



久元祐子さんインタビュー

来年は、日本初上陸のベーゼンドルフアー〈280VC ピラミッドマホガニー〉でウィーン古典派の世界をお届けします

このシリーズの第2回から使用しているベーゼンドルフアー 280VC は、ベーゼンドルフアーが長年培ってきた木の温もりを感じさせるウィンナー・トーンの伝統を受け継ぎながら、切れ味の良さやパワーを兼ね備えています。即興的な裝飾音にも敏感に反応し、濁りのない明晰な音色で奏者の想いを受けとめてくれる楽器だと思えます。

来年はこのシリーズを休み、ベートーヴェン・イヤールに合わせて「モーツァルトとベートーヴェン」をテーマにしたリサイタルを、2020年11月12日、紀尾井ホールで開催します。その際には、現在ウィーンの工房で制作中の名器〈280VC ピラミッドマホガニー〉を使用します。オーストリアアルプスで伐採された樹齢90年の木々を5年間かけて乾燥して厳選した木を生かしたすばらしいピアノです。このオンリーワンの楽器の美しい響きとともに、ウィーン古典派の世界にアプローチしたいと思えます。



ツァルトに与えた影響、2人の作曲家の晩年の作風の違いを浮き彫りにするプログラムを、ベーゼンドルフアー 280VC の繊細かつダイナミックな音色で奏しませてくれました。

前半では、ハイドント（ピアノ・ソナタ第23番）とモーツァルト19歳の作品（ピアノ・ソナタKV280）を対比させ、若き日のモーツァルトのハイドントを敬愛する心情を、繊細なアーティキュレーションと透明感のある音色で清々しく表現。続いて、ハイドントの鍵盤作品の最高傑作とも言え



る（ピアノ・ソナタ第52番）を、出だしの重厚な和音から華やかに充実した響きを駆使し、壮大なスケールの演奏を構築しました。

後半は、モーツァルトの（ピアノ・ソナタKV570）と（ピアノ・ソナタKV576）。この最後の2曲のソナタは、清澄な音楽世界で遊ぶモーツァルトの魅力にあふれた作品ですが、久元さんは柔軟なタッチでベーゼンドルフアー 280VC からの色彩豊かな音色を生み出し、モーツァルトの晩年の境地を鮮やかに描きました。深い感動に包まれた聴衆からの拍手に応えて、アンコールは、モーツァルト（グラーズハーモニカのためのアダージョKV356）、そして、日本とオーストリアの修好150周年にちなんで、ヨハン・シュトラウスⅡ（酒・女・歌）。ウィンナー・トーンならではの遊び心に満ちた優雅な演奏で、コンサート締めくくりました。

（森岡葉）